

ゲーム通じ介護理解

江陵高で初の福祉フェス

【幕別】「介護の日」の11日、江陵高校（鈴木讓二校長、生徒379人）で福祉科の全学年78人による初の「福祉フェスティバル」が開かれた。生徒たちはゲーム形式で、日ごろ学習する福祉の知識を確認した。

福祉に楽しく取り組むとともに、異学年交流の促進も狙い、授業の一環で企画した。午前9時40分にスタート。生徒は学年混合で7チームに分かれ、利用者の目線に立った介護をロールプレーで再現したり、車いすリレーや認知症予防ゲームで団結力を試すなど、介護に関わる6種類の「競技」に取り組んだ。

指遣いの微妙なタッチを意識した」といい、「滑らかでしなやかな自分の演奏の持ち味を出せた。受賞できるとは思っていなかったの
でうれしい」と喜ぶ。

2歳からエレクトーンを習う2人は、良きライバルとして切磋琢磨（せつさく）

このうち「報・連・相マスタ」と題した伝言ゲームでは、認知症の人が施設を徘徊（はいかい）するビデオ劇を見た各チームの代表が、ポイントになる点をメンバーに伝達。必要な情

報がうまく伝わらず、苦戦するチームもあった。
同校は来年以降も同フェスを継続する予定。福祉科主任の反保健教諭は「介護の現場で『報・連・相』は基本。楽しみつつ、知識の確認や反省をする機会になった」と話した。

（佐藤いづみ）



伝言ゲームで大事な要素を伝え合う生徒たち